

発達障害児支援に携わる学生ボランティアが抱える困難について

—学生への支援策の検討に向けて—

The difficulty of the student volunteer who participates in developmental disorder child volunteer
—For Consideration of support measures for student volunteers—

伊藤 里恵¹

¹大妻女子大学大学院人間文化研究科臨床心理学専攻

Rie Ito¹

¹Studies in Clinical Psychology, Graduate School of Studies in Human Culture, Otsuma Women's University
2-7-1 karakida, Tama-shi, Tokyo, Japan 206-8540

キーワード：支援者支援，発達障害，援助成果

Key words : Supporter support, Developmental disorder, Helping effects of helpers

抄録

発達障害児支援を行う学生には、学生ボランティアが抱える活動課題や発達障害児支援での課題の他に、地域で活動を行う発達障害児支援携わる学生ボランティアであるからこそその困難を抱えているのではないかと考えられる。今回の質問紙調査では、『活動での困難』という点に関し、主に発達障害をもつ子どもに如何に接するか、その知識や技術の無さが背景にあると考えられる困難の回答が得られ、『活動の改善点』については、「情報共有の必要性」や「発達障害知識の必要性」、「技術の引き継ぎの必要性」などといった回答が得られた。また、上級生の個人的達成感の欠如が明らかとなった。これは上級生になるにつれて責任が増し、種々の困難が顕著に感じられたことが理由ではないかと考えられる。それに加え、成員にサポートされているという感覚が得難い状況があることも示唆された。

1. 序論・研究目的

阪神淡路大震災以後、被災者支援が盛んに行われたことに伴い、支援者側にかかるストレスや二次受傷が指摘され、支援者への心のケアに今関心が高まっている。これは被災者支援に限った話ではなく、医療、福祉、教育などの領域においても支援者への支援が注目されつつあるという。『発達障害児支援』でもこれは同様であり、発達障害児支援に携わる対人援助職への支援についての研究が行われ始めている(酒井・野崎, 2014, 高原・三國, 2014, 山本, 2013 ほか)。

発達障害とは、発達障害者支援法において「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害、その他これに類する脳機能障害であってその症状が通常低年齢において発現するもの」(発達障害者支援法における定義 第二条)であると定義されている。発達障害児対象の地域活動では学生ボ

ランティアが活躍している場合も多い。興梠(2001)は学生ボランティア活動の課題を以下10点にまとめている。

- ①地域交流経験の未熟さ
- ②時間的制約
- ③継続性の限界
- ④組織運営経験の未熟さ
- ⑤活動資金の限界
- ⑥活動拠点の不安
- ⑦情報の不足
- ⑧人的資源の限界
- ⑨活動経験の伝承の困難
- ⑩学校組織への影響力の不足

また、酒井・野崎(2014)は教師が困難さを感じた発達障害を通して主にみられる生徒の問題行動を①コミュニケーション②衝動性③暴力④感覚の過敏性の以上4点に分類している。発達障害児支援を行っている学生は興梠(2001)や酒井・野崎(2014)が挙げる課題のような苦労や困難さ以外にも、地域での発達障害児支援に携わる学生ボランティアであるからこそその困難を抱えているのではないかと考えられる。

前川(2007)によると、特別支援員として小・中学校へ派遣される学生支援員のストレス反応や困難さの体験は、①精神的問題②行動的問題③身体的問題と以上3つのバーンアウトの症状として訴えられるという。学生ボランティア課題の複合により、学校領域で特別支援員として活動を行っている学生と同じように地域コミュニティ内で発達障害児支援を行っている学生ボランティアにもこのようなバーンアウトが引き起こされる可能性をはらんでいるのではないだろうか。

発達障害児を対象とする地域コミュニティでの学生ボランティア活動は現在多くの場で行われている。しかしながら、発達障害児支援者支援の研究として、地域での発達障害児支援を行っている学生ボランティアを対象とした研究は未だ少ない現状がある。

本研究では、著者自身が活動していた発達障害児ボランティアサークルを調査対象とし、学生ボランティアが活動を行う際に感じている困難に焦点をあて、学生の活動リタイアを防ぎボランティア活動を円滑に進めるための学生ボランティアへ向けた基礎的研究を行う。地域資源を考えた際に大きなマンパワーとなりうる学生ボランティアへの有効な支援システムの構築は、地域で行われる発達障害児支援の発展に寄与すると共に、地域コミュニティでの発達障害児支援活動を行う多くの学生ボランティアサークルにとっての一助となるだろう。

2. 調査方法

予備調査

質問紙作成の参考として、K大学児童福祉ボランティアサークルのOB・OG各1名(計2名)に対し、サークル活動を行っていた当時困難に感じていた点や活動の改善点についてのインタビューを行った。

質問紙調査

2-1. 調査対象者

K大学児童福祉ボランティアサークルの学生18名(2年生8名, 3年生9名, 4年生1名)。

2-2. 調査時期

2014年12月10日, 17日に質問紙を配布。(有効回答13, 回収率72.2%)

2-3. 調査方法

個別自記入形式の質問紙調査で実施された。授業期間中の水曜と金曜の昼休みに行われている当団体の集会に伺い、その参加者に配布。各自記入後、郵送にて回収。

2-4. 調査内容

I. フェイスシート

年齢・学年・性別・団体加入時期・参加活動・活動頻度の記入を求めた。

II. 当団体への加入動機について選択肢回答後、具体的内容での自由記述回答を求めた。

III. ボランティア活動継続動機測定尺度

妹尾・高木(2003)が作成した、継続的に援助行動を動機づける要因を探る尺度である(5件法16項目)。この尺度は【自己志向的動機】(ボランティア活動を活用してのボランティア自身の成長や充足を求めた動機と解釈されるもの)、

【他者志向的動機】(他者の幸福・安寧など他者志向的な動機と解釈されるもの)、【活動志向的動機】(援助に関わらないところでのボランティア活動のプラスの面を重視した動機と解釈されるもの)の3因子で構成されている。

IV. バーンアウト尺度

久保・田尾(1992)がMaslach・Jackson(1981)に準拠して作成した田尾(1989)の尺度を更に改訂した尺度である(5件法17項目)。この尺度は、心理的な疲労感、虚脱感を示す【情緒的消耗感】、煩わしい人間関係を避けたり、対象者の個人差や人格を無視し、機械的に対応する傾向を示す【脱人格化】、仕事の成果に伴って感じる成功感や効力感を示す【個人的達成感】の3因子で構成されている。【個人的達成感】について、バーンアウトの症状としてはこういった達成感が低下してしまう徴候がみられるという。

V. 自由記述項目

『サークル活動を通しての困難』《子どもとの関わり》《親との関わり》《サークル運営》の3項目、『《ボランティア活動》《サークル運営》での改善点』の2項目、『発達障害児ボランティアであるからこそあなたの気持ち』の計6項目について、自由記述での回答を求めた。

3. 結果

妹尾・高木(2003)のボランティア活動継続動機測定尺度について、下位尺度ごとに評定値を合計し尺度得点を出したところ、【自己志向動機】=3.80, 【他者志向動機】=3.91, 【活動志向動

機】=4.27 という結果が得られた。このことから当団体では【活動志向動機】が最も支持されており、自己志向的動機が3つの下位尺度中最も低いということが明らかとなった。

また、久保・田尾(1992)のバーンアウト(燃えつき症候群)尺度を、久保・田尾(1996)のバーンアウトの自己診断表(『まだ大丈夫』『平均的』『注意』『要注意』『危険』の5段階で診断される)に基づき個々に採点した結果、【情緒的消耗感】と【脱人格化】については全員が『まだ大丈夫』～『平均』の範囲内であったが、【個人的達成感】では『注意』が1名、『要注意』が2名該当すると結果が得られた。また、上記した3名はいずれも大学3年生であった。

自由記述についてはKJ法での分析を行っている。『サークル活動を通しての困難』を聞いた3項目において、全員から回答が得られたのは「子どもとの関わり」での困難の項目のみであり、ラベル数も「子どもとの関わり」=22、「親との関わり」=11、「サークル運営」=13と圧倒的に「子どもとの関わり」が多かった。

『サークル活動を通しての「子どもとの関わり」での困難』についてKJ法を用いて分析した結果では、「意思の汲み取りに関する困難」や「声かけに関する困難」など、発達障害をもつ子どもに如何に接するか、その知識や技術の無さが背景にあると考えられる回答が得られた。『活動の改善点』については、「情報共有の必要性」や「発達障害知識の必要性」、「上級生から下級生へ技術の引き継ぎの必要性」、「ボランティアの意識改善」といった回答が挙げられた。

4. 考察

バーンアウト尺度について、バーンアウトの核とされている【情緒的消耗感】において、全員が『まだ大丈夫』であったことから、当団体においてバーンアウトが引き起こされている可能性は低いと考えられる。バーンアウト尺度の【個人的達成感】の低さやボランティア活動継続動機測定尺度の【自己志向的動機】の低さは、自身の行っている援助活動から肯定的感情が得られていないことを窺わせる。妹尾・高木(2008)は援助成果が得られるほど活動継続の意志が強められること、ボランティアがネガティブに活動を認識した場合、その活動は継続されないことを示している。援助成果が十分に得ら

れていると考え難い今の活動状況は、学生の活動リタイアの可能性をはらんでいると考えられる。

実際の援助活動である発達障害児との関わりでは、子どもによって違う様々な障害に対して、学生自身が行う支援方法が適切なかが分からず、不安を抱えたまま活動を行っている様子が示唆された。援助成果の面では、上級生の達成感の低さが目立った。【個人的達成感】の低い3名の自由記述回答をみると、「引き継ぎの重要性」や「発達障害知識の必要性」、「メンバー全員で活動を行う必要性」が語られていた。上級生となり、責任が増したことによって、発達障害知識の乏しさや引き継ぎの不足が顕著に感じられたのだと考えられる。またそれに加え、成員にサポートされているという気持ちをもち難く、自分一人で頑張っている感覚を抱いているのではないかと自由記述回答から示唆された。

5. 今後の課題

発達障害児支援を行っている学生らに対して、知識面や情緒面からサポートを行う第三者の機能について、今後検討する必要があるだろう。

謝辞

本研究にご協力いただきましたK大学児童福祉ボランティアサークルの皆様、深く感謝申し上げます。

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所「大学院生研究助成」(DB2601)の助成を受けたものである。

引用文献

- [1]妹尾香織・高木 修(2003). 援助行動経験が援助者自身に与える効果—地域で活動するボランティアに見られる援助効果—. 社会心理学研究. 18(2), 106—118.
- [2]妹尾香織(2008). 若者におけるボランティア活動とその経験効果. 花園大学社会福祉研究紀要. 16, 35—42.
- [3]興梠 寛(2011). 学生の自主的活動を支援する大学とボランティアスタッフのためのガイドブック. 内外学生センター.
- [4]久保正人・田尾雅夫(1992). バーンアウトの

測定. 心理学評論. 35, 361-376.

[5]前川あさ美(2007). つなぐ心と心理臨床, 有斐閣選書.

[6]Maslach, C. & Jackson, S.E. (1981). The measurement of experienced burnout. *Journal of Occupational Behavior* 2. 99-113.

[7]文部科学省(2004). 発達障害者支援法 (<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/H16/H16HO167.html>) (2015年2月11日).

[8]酒井香奈・野崎とも子(2014). 発達障害を持つ子どもの言動から教師が受ける感情と教師への

の支援について, 千葉大学教育学部研究紀要. 62, 67-73.

[9]田尾雅夫・久保真人(1996). バーンアウトの理論と実際—心理学的アプローチ—. 誠信書房.

[10]高原千代・三國牧子(2014). 発達障害における支援者支援研究の現状と展望. 九州産業大学国際学部紀要. 57, 141-158.

[11]山本真由美(2013). 特別支援教育における学習支援ボランティア学生への学内支援体制について. 大阪教育研究ジャーナル. 9, 143-151.

Abstract

This study is the first report of basic research to support the volunteer students who work with the children with developmental disabilities. It is found, to work with the children with developmental disabilities, these volunteer students have the difficulties. To solve the difficulties, the following three points were considered to be important measures. First, sharing informations among volunteer members, secondly, the increase of knowledge concerning developmental disorders, and finally, handover of the skills of activities. Also, it was found that senior students are getting difficult to gain a sense of accomplishment because of the increase of responsibility in their volunteer activities, and also feeling the difficulties strongly. Furthermore, the existence of situation was implied that senior students could not feel receiving the supports from other members. As the future tasks, through interviews, further detailed measures to be explored to cope with existing difficulties.

(受付日: 2015年7月6日, 受理日: 2015年7月16日)

伊藤 里恵 (いとう りえ)

現職: 大妻女子大学大学院人間文化研究科臨床心理学専攻修士2年

現在は発達障害児支援を行っている学生への支援について, 学生ボランティアが抱える困難に焦点をあて, 研究を行っている.